

本学小児歯科外来に来院した患者の永久歯の石灰化度および先天欠損歯と過剰埋伏歯の調査

○ 西岡孝浩、日高彰子、西田郁子、
牧 憲司
九州歯科大学口腔機能発達学分野

【緒言】 歯牙の欠損傾向や萌出時期の変化などに関心が高まってきているが、日本人小児期の歯の形成に関する報告は少ない。我々は6歳から10歳の患児を対象に、永久歯の歯冠と歯根の形成状態と年齢との関係を調査した。

【方法】 我々はこの5年間で本学小児歯科外来に来院された6歳から10歳までの患者約300名を対象とし、そのパノラマ写真から犬歯から第2大臼歯までの歯牙について観察を行い、Nollaの石灰化年齢を用いてそれぞれの歯牙について評価を行った。そして得られたデータを用いて統計的手段により石灰化年齢と年齢との関係を考察した。また先天欠損歯と過剰埋伏歯を調査した。

【結果および考察】 犬歯から第2大臼歯までの歯について調査し、統計処理を行ったところ、歯牙の石灰化度は左右で有意差は見られず、また年齢の増加とともにその石灰化年齢の上昇率は低下しているように思われる。このことは歯根の形成には時間が必要であることを示している。また過剰埋伏歯を有しているものは全体の約12%で、上顎正中部に最も多かった。先天欠損歯を有しているものは全体の約17%で、第2小臼歯に多くついで側切歯であった。

唇顎口蓋裂児に認められた下顎乳臼歯部癒合歯の2症例

○ 湯浅真理, 福本 敏, 山田亜矢, 湯浅健司,
平野克枝, 山本晋也, 野中和明

(九大・院・小児歯)

【目的と方法】 九州大学小児歯科では、現在約数百名の唇顎口蓋裂児の定期管理を行っている。我々はこれまで唇顎口蓋裂児では口腔内にエナメル質形成不全や過剰歯、矮小歯等の異常が多く見られることを報告してきた。今回、下顎乳臼歯部の癒合歯が認められた2症例を報告する。これらの癒合歯部の後継永久歯の形成状況とともに検討を行った。

【症例1】 患児：5歳女児（両側性唇顎口蓋裂）初診日：H13/7/30(0歳時)患児は下顎右側第一第二乳臼歯が癒合しており、その後継永久歯である下顎右側第一小臼歯に先天性欠如が認められる。上顎右側乳側切歯と乳犬歯間、上顎左側乳切歯と乳側切歯間に過剰歯が、また左側の乳切歯と過剰歯の癒合が認められた。

【症例2】 患児：4歳男児（両側性唇顎口蓋裂）初診日：H14/7/10(0歳時)患児は下顎右側第一第二乳臼歯の癒合歯、上顎左右側側切歯、下顎左右側切歯と下顎右側側切歯にエナメル質形成不全が認められた。

【結果と考察】 我が国における乳歯癒合歯の割合は欧米に比べ高率であり2-3%と報告されているが、乳臼歯部では極めて稀である。また、従来から約40-50%の頻度で後継永久歯のうち1歯に先天性欠如が見られることが報告されている。今回の調査で、乳臼歯部の癒合歯が唇顎口蓋裂児の2症例において見られ、同様に後継永久歯の先天欠如を認めた。このことから、唇顎口蓋裂の発症に関わる因子が、臼歯部の癒合歯の形成に何らかの形で関わっていることが示唆された。また、永久歯の先天性欠如が高頻度で起こる事、さらには顎の非対称性を生じる可能性についても保護者に説明する必要があると考えられた。